



## 下から診るのか、上から診るのか③

先号の①ではバイオメカニカル的な観点、②では神経学的な観点からAMの「下」から診て調整を行う根拠の説明をさせていただきました。今回は、「生命エネルギー学的な観点」から考察させていただきました。B.J.パーマーの哲学の「Above Down Inside

Out」(上から下へ、内から外へ)を信奉しているカイロプラクターは上部頸椎だけをアジャストメントします。そ

の基本的な理由は、主に神経学的な「圧迫説」に基づいています。ホースが挟まれて水の流れが悪くなるように、上部頸椎がズレると神経が圧迫され、神経エネルギーの伝達が悪くなり様々な症状につながるという仮説に基づいています。

「圧迫説」がどれだけ信憑性があるかは差し置いて、上部頸椎が関連する領域には、生命維持全般に関わる大切な

神経中枢や固有感覚受容器が多く存在しており、その部位へのアジャストメントによる振動刺激は、反射系全般をリセットする意味では神経学的な効果が得られると私は考えています。

足関節や膝関節痛の患者の場合、AMでは即効性があり、多くの症例で効果がその場で分かります。上部頸椎矯正だけの信奉者の考えでは、「上部頸椎だけをアジャストして、後は「イネイトに任せる」となるわけですが、足関節捻挫なども、AMの臨床でみられるような即効的な効果はあるのででしょうか。捻挫などによって明らかに足関節周辺の固有感覚受容器に神経機能障害がある場合、「イネイトに任せる」というよりも、必要な問題部位の機能を早期に調整した方が、本来の「イネイト」が最大限に発揮されると

いうのが私の臨床経験です。さらに、生命エネルギー的な観点を神経学的な概念を織り交せて説明すると、神経エネルギーは上から下への遠心性(運動)だけでなく、下から上への救心性(感覚)も考慮しなくてはなりません。「Above Down Inside Out」(上から下へ、内から外へ)と反対の定式は「Below Up Outside In」(下から上へ、外から内へ)です。両方の定式のどちらが正論ということではありませんが、人間が様々な環境に適応していくためには両方の働きが大切です。「Above Down Inside Out」と「Below Up Outside In」の両方の定式がうまく調和してはじめて、「イネイト」が発揮されるということではないでしょうか？